地域の真ん中に赤い羽根

テーマ型募金

「認知症架け橋募金」で認知症にやさしいまちづくり
～宮崎県・高鍋町社会福祉協議会の取り組み～

宮崎県高鍋町社会福祉協議会（以下、町社協という）では、テーマ型募金「認知症架け橋募金」を実施しています。テーマ型募金の取り組み状況について町社協・地域・総務係長 西村 拓さんにお話をうかがいました。

■ テーマ型募金「認知症架け橋募金」を始めたきっかけ

町社協では平成27年からテーマ型募金「認知症架け橋募金」に取り組んでおり今年で8年目になります。開始した当時は町内で認知症介護者の会・高鍋町認知症介護者のつどい（以下、「介護者のつどい」という）が組織された時期であり、高齢化が進むなかで認知症への関心が高まっていました。介護者のつどいの方々から「認知症の高齢者の実態をもっと知ってほしい」との声もあり、町社協の事業担当と共同募金担当で「認知症を啓発する事業に何か取り組めないか」と相談したことをきっかけに、赤い羽根のテーマ型募金を活用して認知症を地域住民に広く啓発する事業を企画することになりました。

■ テーマ型プロジェクト委員会を立ち上げ

「地域住民に認知症を広く周知するにはどうしたらいいか」という問題意識から、テーマ型募金の取り組みは町社協だけではなく、地域住民や当事者の方々の意見を反映できるよう「テーマ型プロジェクト委員会」（以下、プロジェクト委員会という）を立ち上げることにしました。委員会には、介護者のつどいの関係者、認知症地域支援推進委員、共同募金助成審査委員会委員などに協力をいただき、テーマ型募金の進め方や認知症の啓発事業についても意見を伺いながらテーマ型募金の実施に至っています。

■ スローガンを掲げて募金の協力を呼びかけ

テーマ型募金のスローガンを「めざせ！ 認知症に優しい町・高鍋」として、テーマ型募金への振込用紙を印刷したチラシを地域住民に配布して広く募金への協力を呼びかけています。商工会の元会長がプロジェクト委員会委員を務めていることもあり、紹介いただいた地元企業に担当者が出向いて依頼したり、町社協や役場、公民館の窓口などに募金箱を設置して寄付を受け付けています。

■ 「認知症架け橋川柳」を募集して受賞作品をのぼり旗に

認知症の理解、啓発を図るために認知症にまつわる「認知症架け橋川柳」を募集しています。小学校の5、6年生や中学校の全校生徒、高齢者施設にも協力を呼びかけ、子どもから高齢者まで幅広い世代の方々に川柳に応募いただいています。1年目の応募数は100件程度でしたが、現在は700件程度の応募があります。「今年の川柳の募集はいつから始まるのか」と問い合わせもあり「認知症架け橋川柳」は地域に根付いた事業になりつつあります。

町社協では、認知症に関する正しい知識を身につけてもらうため、小・中学校の生徒向けに認知症サポーター養成講座を実施していますが、子どもたちも認知症の人やその家族を地域で支えることの必要性を認識しているのか、毎年多くの応募をいただいている状況です。

応募いただいた川柳の中から20作品を受賞作品として選定し、受賞作品をのぼり旗にして町内の小・中学校や役場や公共施設などの大勢の人が集まる場所に設置します。「徘徊も　いっしょに歩けば　散歩道」「忘れても　あなたの思い出　僕の中」など、気持ちがほっこりするような川柳が多数寄せられていて、川柳を通じて認知症のことを身近に感じてもらい、自然と地域で支え合う輪が広がっていると感じています。

「認知症架け橋川柳」募集ポスター

■ テーマ型募金を通じての地域の変化

事業を企画した当初は、年度途中に検討したこともあり事業実施がためらわれましたが、「資金がないからやならない」のではなく、認知症という課題を多くの人に理解してもらうために赤い羽根のテーマ型募金を活用しながら取り組むことにしました。テーマ型募金「認知症架け橋募金」に取り組んだことで、「認知症架け橋川柳」の募集を継続して行うことができ、この活動は多くの地域住民の協力を得られたものになっています。地元の企業や看護学校から「のぼり旗を設置したい」との協力の申し出をいただいたり、募金だけではないさまざまなつながりが生まれています。募金については横ばいの状況にあり難しさもありますが、認知症になっても安心して暮らせる地域になるよう、川柳以外の新たな啓発事業も検討しながら、これからも認知症への理解を広げていきたいと考えています。